

第1回工作作品発表会 on ウェブ開催報告

第1回工作作品発表会onウェブ開催報告

大分大学
加藤 義隆

1. はじめに

2022年12月14日水曜日に <https://www.jsme.or.jp/tsd/news/sakuhin/2022Dec.pdf> の URL で、第1回工作作品発表会onウェブが日本機械学会技術と社会部門の企画として開催された。企画に際して、日本機械学会事務局の技術と社会部門担当だった野口明生氏には度々相談をさせて頂き、事務局にはお世話になった。発表件数12件で、2023年1月17日時点で最も少ない動画視聴回数は33回であった。2023年3月に、上記URLの利用は中止され、<https://www.jsme.or.jp/tsd/craftwork/index.html> をリンク元としてPDF版とhtml版が公開されている。html版の公開は、高藤圭一郎委員の尽力と富山県立大の神谷和秀先生の協力および秋山靖博委員によって成された。

この催しは、開催日を決めて、日本機械学会正会員が申し込んだ工作作品の紹介をウェブ上で表示するというものである。発表は、「タイトル」「画像」「200字以内の説明文」「30秒以内の動画を表示するウェブサイトのURL」を表示するだけで、口頭発表などは無い。

2. 企画の発端

工作作品発表会 on ウェブの企画提案の発端となる出来事は、低温度差スターリングエンジン競技会・発表会が開催できなくなったことにある。2020年から、COVID-19感染対策として人が集まる集会事業を日本機械学会として開催できなくなった。なお2020年度は、エンジンシステム部門企画のスターリングサイクルシンポジウムの開催会場で、「低温度差スターリングエンジン競技会東京」を同日開催する予定で、会告も出していた。そんな経緯もあり、低温度差スターリングエンジンをウェブ上で披露する催しの企画提案が提案された。より具体的に記すと、「2021年4月21日午後の技術と社会部門新旧合同運営委員会に提案する意思表示」が、2021年4月6日開催のエンジンシステム部門スターリングサイクル委員会で表明され、賛同が得られた。その時点では「低温度差スターリングエンジン動画発表会」の仮称で、何も関係者との調整も行っておらず、詳細も検討されていなかった。

スターリングエンジン以外の作品の取り扱いは当初から考えられていた。2021年4月の委員会資料でも最後の一文が「集会事業の自粛が解けた後も事業を残すことや、取り扱う作品をスターリングエンジン以外に広げることも考えたい。」である。7月には日本機械学会事務局で技術と社会部門担当の野口氏と相談を電子メールでしていたが、スターリングエンジン

以外を対象とする意向を加藤は記述していた。2021年10月21日開催の技術と社会部門総務委員会に、加藤の私案として出された文書では、対象作品をスターリングエンジンに限定していない。

3. 低温度差スターリングエンジン競技会発表会実行委員会

上述のように、工学作品発表会 on ウェブは低温度差スターリングエンジン競技会・発表会が開催できなかったことが発端となり企画提案された。そのことは、2022年の第1回工作作品発表会 on ウェブを、日本機械学会技術と社会部門の低温度差スターリングエンジン競技会発表会実行委員会が取り扱ったことにつながる。なお低温度差スターリングエンジン競技会発表会実行委員会は、2019年1月30日開催の技術と社会部門総務委員会にて低温度差スターリングエンジン競技会・発表会の運営を工学・技術教育委員会からの分離する提案がなされ、2022年に設置された。

工作作品発表会 on ウェブは、会告の内容が2022年2月頃から検討されており、会告が日本機械学会のウェブサイトで表示されたのが2022年7月1日である。その間に、発起人の加藤が、工学・技術教育委員会の委員長から、それまで存在していなかった低温度差スターリングエンジン競技会発表会実行委員会になった。工作作品発表会 on ウェブの作業の進行状況を鑑みれば、2022年度は「言い出しっぺ」が放り出すことが許される状況ではなかった。

4. 発表形式の意図や経緯

第1回工作作品発表会 on ウェブでは、2022年12月14日9時から17時と発表時間を限定し、動画をリンク先とするURLを表示した。動画コンテンツの取り扱いは、日本機械学会誌2021年Vol.124 No.1234で熱工学部門の熱工学コンファレンスのセッション「熱工学コレクション」を集めたウェブサイトが紹介されていた。そのこともあり日本機械学会のサーバで動画を保存して頂くことを考えたこともあったが、あまり利便性は良くないと判断した。動画投稿サイトYouTubeに学会関係のアカウントで動画をアップロードすることも、動画投稿サイトの規程により、有償の事業にできない不都合があり、取りやめた。

動画を発表者の管理下に置く一方で、発表者による動画の改変に備えて、発表の期間を定め、動画のリンク先を示すURLは学会側で改変できるようにした。ウェブ上で画像や文書と共に、動画のリンク先URLを表示し続けることは可能である。リンク切れや公序良俗に反するコンテンツにリンクすることを、企画者として警戒した。

動画の時間は30秒以内で、説明文も和文で200字は30秒程度である。地上波のテレビ放送で行われるテレビCMの長さに近いもので、この程度なら動画や説明文をまとめて閲覧しても、過大な負荷にはならないと判断した。発表者には、まとめる力が求められる。

5. 運営の反省

申込み締め切り半月前のインフォメーションメール配信だったので、関係者以外で発表申込された方は、恐らく慌ただしいものになった。運営関係者にとっても、他の講演会開催直前に工作作品発表会 on ウェブの発表申込み締め切りがあったため、工作作品発表会 on ウェ

ブへの発表申込を受け付ける作業は慌ただしいものになった。発表申込み締め切りから発表まで 2 週間だと、関係者の臨機応変かつ迅速な対応のおかげで何とかだったが、修正要求・発表申込み費用の支払い請求・ファイルアップロードなど一連の作業に遅れが生じると、当日にアップロードが間に合わない可能性もあった。

発表申込みを受け付けるメールアドレスは、個人ではなく、複数の関係者が確認できるものが望ましい。また申込みを受け付けるフォーマットも、「Word ファイルのメール添付」以外の方法を検討する余地がある。

不具合を起こす発表申込が少なくなく、画像のファイルサイズ超過・文字数の超過・動画の時間が超過など、ある程度申込前から起こる事が予想された不具合もあった。実際に申込がくるまで予想していない不具合は、発表申込を添付ファイルで受け付けることができても、その後の取り扱いに困るところがある。動画については、「主たる登場人物に公開の許諾が取れていない」「動画編集に使ったソフトのライセンス違反が明らか」などの問題点があった。紹介文の方も、「フォントやサイズの変更」「文字数は良いが改行が多過ぎてページに納まらない」などのトラブルがあった。そういった企画運営する側の不備に対しても、今回は発表者が対応してくれた。

6. 実物を取り扱うこだわり

ウェブでの発表と、開催地に集まる催しは異なる。低温度差スターリングエンジン競技会・発表会は、作品を持ち寄って参加者同士が物を触りながら学ぶ機会であり、動かない作品であっても歓迎される場で、過去のニューズレターからリンクされる動画を見て行けば飲み会よりも参加者同士の距離が近くなる場面もあるのだが、開催地に集まらなければ実施できない点は欠点であった。工作作品発表会 on ウェブは、動かないスターリングエンジンを発表する雰囲気ではなく、発表された作品を見ても隔靴搔痒な感じではあるが、開催地に集まる必要が無い点では遠隔地に居住する者にとって長所はあると感じる。

最近個人的に、「工作は釣りよりもレアな趣味になりつつあるのか」と、感じる。実際のところは不明で、それを確認する気は無い。しかし、工作がレアな趣味になりつつあるとの思いを強めたのは、子供の授業参観の際で、小学生の夏休みの作品展示を見た時である。自分の手で描いた絵や、自分で材料を加工した工作作品が少ない。市販品を組立てただけのものでも、まだ自分で組み立てているならマシである。「夏休みの作品」の中に多数あったのが小学校で参加者募集された教室で作った物である。その教室で子供が大した作業をしていないのは、同じものが我が家にあるから分かる。

無様晒しても楽しみながら挑戦する姿勢は示したい。私自身の作品を今回は二つ発表した。枝豆の水耕栽培はそういった動画である。BGM は、日本機械学会技術と社会部門ニューズレターの No.44 と No.45 の記事とも関係があるのだが、自分で時間が合うまで何度か演奏し直したものである。工作作品発表会 on ウェブの企画立案者がアップロードしているから耳障りだが、普通にその他の日本機械学会正会員の発表であれば、二度とその動画を視聴しなくなる以上の反応は恐らくない。当然だが、エレキベースの編曲や演奏は発表者加藤の仕事ではない。「学校の勉強だけじゃ・・・」と子供や学生に言うだけでなく、「仕事ではないこ

と」をやる姿も見せて良いとは思ふ。それこそ学生や児童・生徒にとって工作は、「学校の成績が良くなる訳ではない」「無駄」「面倒臭い」「生業にする訳ではない」「特技として誇れるものでない」「三日坊主になって投げ出すかも」など、取り組まない理由はいくらでも挙げられる。でも、工作に限らず、何か挑戦したら失敗や挫折はあるもので、うまくいくものでも最初は無様なところから始まる。何か新しいことに挑戦するなら、失敗が破滅を引き起こす挑戦よりも、金と時間の余裕の範囲内で挑戦できるのがベターだと思う。その挑戦が工作であるなら、作品を工作作品発表会 on ウェブで発表して頂きたい。

日本機械学会技術と社会部門ニュースレター: <http://www.jsme.or.jp/tsd/news/index.html>

日本機械学会

技術と社会部門ニュースレターNo.47

(C)著作権:2023 一般社団法人日本機械学会 技術と社会部門